

# いわさきちひろ没後40年～ ちひろ美術館 松本猛さんに聞く

いわさきちひろ『戦火のなかの少女』戦火のなかの子どもたち(岩崎書店)より1972年



**いわさき・ちひろ** (1918-1974)  
本名・松本知弘。1918年に福井県で生まれ、東京で育つ。「子どもの幸せと平和」をテーマに水彩画を描き、絵本画家として活躍。生涯で9400点を超える作品を残した。46年、疎開先の長野県松本市で日本共産党に入党。夫は同党元衆院議員で弁護士の松本善明氏。

松川村の同美術館は、夏休み中とあって多くの人でにぎわっていた。入館者の様子が見渡せる館内の一室で、松本さんは思いを巡らしながら語り始めた。「母は必ず描いたでしょうね。自分が若い頃に体験したこと比べて、何を描けば良いか真剣に向き合っていたと思います。『気づいた人は何らかの発信をしないと』いけない。それが大人の責任」と考える人でしたから」

透き通るような淡い色彩に、愛くるしい子どものまなざし……。その瞳は、時に純真無垢に、時に心の内を見通すように、観る人を引き付ける。平和を願い、子どもをテーマに描き続けた絵本画家・いわさきちひろさんが他界して8月で40年を迎えた。今、その思いに反するように平和主義を転換する動きが進む。ちひろさんが生きていたら、どう考え、どんな絵を描いたであろうか。長野県の安曇野ちひろ美術館を訪ね、ちひろさんの一人息子で同館常任顧問(元館長)の松本猛さん(63)に聞いた。



ちひろ美術館常任顧問・絵本学会会長

松本 猛さん

## 平和を願い描き続けた絵本画家

# 子どもは幸せでなければ



いわさきちひろ：母の日=1972年

40年経った今も、ちひろさんの絵は輝きを失っていない。いや、平和が脅かされている時代だからこそ、よの輝きを増しているのかもしれない。

### 弱い者が犠牲

1960年代から70年代にかけて、ベトナム戦争が激化するなか、ちひろさんは突如動かされるように反戦ポスターを制作する。ベトナムの子ども、わたしたちの日本の子ども、世界中の子どもみんなに平和とあわせを。戦地の子ども、イフストと共に書き

は、二度と戦争を起してはならない」と決意。平和への願いを子どもに向けてるようになる。松本さんは、「もともと子どもが好きだったこともありすが、『子どもはすべてが未来』と言って、命の象徴として描いていました」と作品に込めた思いを話す。

### 共感する限り

そして、現代。「積極的平和主義」を掲げる政権の下、不戦を誓った憲法9条の解釈が変えられた。「集団的自衛権や秘密保護法の動きは、母が経験した時代と重なる」と松本さんは言う。「治安維持法も最初は対象が限られていたが、どんどん取り締まりが強められました。この方向

「それはきつと、ちひろを必要としている人がいるからでしょう。例えば、ジョン・レノンの『イマジーン』がずっと歌われるのは、彼の思いを共有しているからだと思います。子どもは幸せでなければならぬ」。そう共感する人がいる限り、ちひろの絵は消えないと思います」

北アルプスのふもとにある美術館は、結構な賑わいをみせていた。松本さんは母の目を振り返り、作品に込めた思いを語ってくれた。子どもたちの幸せを願って描き続けたちひろ。イフストと共にその半生が展示された館内を回ると、誰よりも戦争を憎

平和の意味問いかける  
新聞部・南端理伸  
み、子どもを深く愛した彼女の強い意志が浮かび上がる。現代を生きる私たちに平和の意味を問いかけてみる。

添えたのは、こんなメッセージだった。「一番弱い者が犠牲になる」。松本さんは、ちひろさんが生前に語っていた言葉を覚えている。その後、病を押してベトナム戦争をテーマにした絵本の創作に向かう。当時、東京芸大の学生だった松本さんも制作に加わった。そして、命を削るようにして描き上げたのが『戦火のなかの子どもたち』だ。怒りや悲しみの表情、絶望のなかで懸命に生きる姿は、罪無き子どもを巻き込む戦争の現実を写している。

「日本から出撃した米機による無差別爆撃の下で、子どもたちがどんな思いで過ごしているかを母は知っていました。東京の空襲と重ね、責任を感じていたか

「それはきつと、ちひろを必要としている人がいるからでしょう。例えば、ジョン・レノンの『イマジーン』がずっと歌われるのは、彼の思いを共有しているからだと思います。子どもは幸せでなければならぬ」。そう共感する人がいる限り、ちひろの絵は消えないと思います」

子どもに快適な場所  
新聞部・谷聰  
没後40年になると、生るべき部屋、絵本の部屋前にその絵画に接した人は少なくなり、美術館に訪れる人も減りそうなの。しかし、世代を問わず多くの人が来館していることに本當にびっくりさせられた。ちひろの思いが今に息づいていることを実感した。館内には、子どもが遊べる部屋、絵本の部屋(様ざまなデザインの椅子に座って読める)などがあり、十分に楽しめる。外には、花畑、小川、池があり、子どもにとって快適な場所になっている。誰も携帯ゲームで遊んではいけない。本来、子どもはこういう環境が好きなんだと思った。



(上)1954年秋、ちひろさんと猛さん(下)安曇野ちひろ美術館前で新聞部のメンバーと。同美術館は、ちひろ美術館・東京の開館20周年を記念して1997年にオープン。毎年16万人が訪れる。ちひろ作品のほか、世界の絵本画家の作品を展示。館外には3万6500平方メートルの安曇野ちひろ公園があり、北アルプスを望みながら安曇野の豊かな自然を感じることができる。

ちひろの思いが伝わる  
新聞部・矢部あづさ  
雄大な自然にたえずむように美術館はあった。曇り空で北アルプスの山々ははっきりと見えなかったが、天気が良ければ子どもたちだという訴えが伝わってくるようだ。また、アンデルセンと宮沢賢治を題材にした企画展もあり、世界中の絵本が落ち着いた空間で鑑賞できるようになっていた。